

ラトゥールの「地球に降り立つ」の勧め

2020年4月11日 境 毅

「境です。

新開さんの文書と併せてご検討ください。

ラトゥールの提案は新しい政治の創造で、当初私は、被抑圧者へのメッセージだと捉えていたのですが、これは実は各国政府への提案でもあると考え直しました。

もちろん日本政府がこんな方向に舵を切るとは考えられませんが、ひょっとすればフランスならやりかねない、と考えます。というのもコロナの都市封鎖を実施しているフランスでは、フランスのギョーム農相が、大都市の失業者に対して「農場労働に応募しませんか」というプロジェクトを5000人の職員配置で進めているというのです（日刊ゲンダイ4月16日号、高野孟「永田町の裏を読む」362）。まさしくグローバルからローカルへの回帰です。

コロナ後の世界のモデルは、フランスからでしょうか。

添付した文書は、①『地球に降り立つ』（新評論）の勧め

②ラトゥールの『地球に降り立つ』（新評論）のパート19（これは略）

③研究会会報292号、ラトゥールの解説。」

1. ラトゥールの『地球に降り立つ』の勧め

ラトゥールの『地球に降り立つ』（新評論）は、現在進行中の新型コロナ恐慌の、終結以後の世界を解き明かすカギの一つを提供しています。しかも、それは、いま、ここで、誰にでもできる実践の提案です。その紹介を簡単にしましょう。

私は、昨年末から、ラトゥールに注目していて、彼の本数冊を読んでいるところですが、最初に読んだ『社会的なものを組み直す』（法政大学出版会、2019年）で展開されているアクターネットワーク理論については、私が属する生活クラブ京都エルコープの研究会会報で紹介しました（会報292号を添付しておきます）。

彼の論旨は、これまでの社会学を始め自然科学も含めた近代科学への批判で、これからはあらかじめ作り出された理論で現実を解釈するのではなく、モノも含めたアクターのネットワークが存在していることを認め、そのアクターたちの運動や主張を記述することを、この入門書で提起しています（地球というモノも主張していると、ラトゥールはとらえています）。この原書は2005年に出版されたものなので、では、そういう方法論で現代世界をどのように捉えているのかが気になっていました。そして、2017年に書かれた『地球に降り立つ』（新評論）が昨年末に翻訳出版されていることを知り、読んでみました。

異論がある論点もありますが、私が注目したのは政治についての次のような指摘です。

「見た目とは違い、政治の要は政治意識ではなく、地球の形と重さなのである。政治の機能はそれに反応することだ。

政治は対象、賭金、状況、物理的実体、身体、風景、場所につねに向けられている。いわゆる守るべき価値とは常に、あるテリトリーが抱える課題への反応である。そしてその課題を各テリトリーが記述できること、これが条件である。これこそ政治エコロジーが発見した確たる事実である。つまり、対象に適応させた政治ということだ。そのためテリトリーが変われば政治意識も変わる。」（『地球に降り立つ』、83頁）

政治についてのこのような把握は、今日の一般的な統治システムである民主主義と政党政治に代わる新しい政治の提案であると私は考えました。というのも、PDFで添付した本書のパート19で、ラトゥールは、テレストリアル（大地、地上的存在、地球）に居場所をつくっている人々に呼びかけて、その人たちと那些人たちを取り巻くモノといった諸アクターのネットワークが作り出す生活のすべてを記述し、それにもとづいて政治をつくりあげingことを提案しているからです。ここには統治

システムに一票を行使することしか許容されていない現在の政治に対する代案があります。

いずれラトゥールについては書くつもりですが、今や緊急事態ですので、とりあえずこの呼びかけを、みなさまに紹介します。

2. ラトゥールについての補足的説明

ラトゥールの主著『虚構の「近代」』(新評論)は、1989年のベルリンの壁の崩壊と、同年の地球温暖化対策の国際的会議の開催を、社会主義の崩壊と、資本主義が依拠する自然の崩壊による資本主義のもとで暮らす人々の生存の危機と捉えています。そしてその双方の危機を招いた原因を近代思想に求め、その誤りの指摘と新しい非近代の思想を提案しています。近代思想の自然と人間の二分法に対して、非近代としてのアクターネットワーク理論の発想を開示したのです。そして、その時点(1991年)での政治的提案は市民の議会(ヒトの議会)だけでなく、それと同等なものとしての「モノの議会」(『虚構の「近代」』、239頁)の開催でした。

そして2005年に『社会的なものを組み直す』刊行後に書かれた『近代の〈物神事実〉崇拝について』(以文社、原書2009年)で、次のように、政治についての考え方を変えたことを告白しています。

「絶対的な自由が一つの神話であるという理由で、疎外されたものを致命的な束縛から解放することを拒む人だろうか。それとも、ついに自立して自身の支配者となった主体を本当に疎外から解放すると言い張るが、その主体が自身に何かをさせることのできる他の人々との関係を結ぶための手段を——すなわち媒介を——その主体に与えない人だろうか。数年前であれば私は、紛れもなく前者であると即座に回答したであろう。今日では、恥じることなく白状するが、私は躊躇する。今後は私の憤慨は、二つの戦線で、反動主義者と進歩主義者を、反近代人と近代人を、同様に攻撃することを求める。諸々の結び付きを他の結び付きに置き換えると言う人々、不健全な繋がりを断ち切ることを主張するときには、自己の支配者としての主体には——それは今や文字通り客体を持たないものとなったのだから——決して注意を引き付けずに、救済的な別の繋がりを私に示す人々、そういう人々だけが私の関心を引き、私を安心させる。自由の身、解放、自由放任・自由通行といった言葉は、もはや『進歩人』たちの自動的な賛同をもたらしてはならない。常に掲げられた人民を導く〈自由〉の旗を前にしても、それ自体が結び付けるものである物事の中から、良い繋がり、長続きする繋がりを提供する物事を、注意深く選別することが望ましい。」(『近代の〈物神事実〉崇拝について』、127～8頁)

ラトゥールが以前に表明した前者の立場(「絶対的な自由が一つの神話であるという理由で、疎外されたものを致命的な束縛から解放することを拒む人だろうか。」)の意味は、これだけではわからないので、その前の記述を簡単に紹介しておきましょう。ラトゥールは、煙草を吸ってくつろいでいる父親に、娘が「煙草に吸われている」と発話し、それを聞いた父親が、くつろいだ表情から、煙草がやめられないことを気に病む悩める人に転化し、やがて禁煙を誓って煙草を粉々に切り刻むシーンで終わるというマンガを素材に議論しています。ラトゥールは、このマンガを見かけ上の奥深さしかないと評し、その理由に煙草を吸うという物神事物崇拝の主体(ヒト)と客体(煙草)をひっくり返したところで物神事物崇拝の枠組み自体は維持されていることを挙げています。ラトゥールによれば、父親は最初は自分の行動を制御できると考えて行動し、次に自分が煙草という客体によって制御されていると考えて自分は何にもしない。このマンガをこのように解析した後、ラトゥールは次のように述べています。

「これが、自由と疎外という二つの特有語であり、これらの特有語が、あなたも彼らも誰も支配していない事物をあなたにさせることのできる『物神事実』の奇妙な状況を、避けることを可能にしている。いかにして支配性というこの麻薬の中毒から回復するのか。これは驚くべき問であり、ほとんど矛盾する問である。つまり、いかにして解放という嗜好性薬物から自らを解放するのか。」(同

書、127 頁)

このように、ラトゥールにとっての問題は、「解放」という概念自体が嗜好性薬物であるということで、ここからどのようにして自らを解放するか、ということのようです。ですから、彼の以前の立場とは、絶対的な自由が一つの神話であるという理由によってだけでは人々は解放され得ないという認識だということになり、だから「モノの議会」という提案の延長で思考していることになります。

私は正直言って、1991 年の時点での彼のこの提案には絶句したのですが、2005 年の入門書『社会的なものを組み直す』の時点でもこの提案は維持されていたのでしょう。ところが『近代のく物神事実>崇拝について』が書かれた 2009 年に、先に引用した反省がなされたのです。この反省の成果として『地球に降り立つ』のパート 19 の提案がある、というように私はとらえました。

私自身、1992 年に設立された京都エル・コープの非常勤理事をしながら生活のためにいろいろなことをやっていましたが、その一つが有限会社スペースゆいを設立して、有機農業従事者への聞き取りを 7 冊の書籍として出版することでした。いまから考えれば、このような活動は、パート 19 の先行実施だったように思い、出版物の PDF 化とネット上での公開を考えるに至っています。政治を、現在の民主主義という制度的枠組みにとらわれず、テレストリアルを障地に、モノも含めた記述を武器に、新しい政治を組み立てる構想を一人一人が手にすることができる時代を招き寄せたいです。

協同組合運動研究会報 292号

2020年2月17日発行 (年間会費一口3500円)
京都市南区久世上久世町161 生活クラブ京都エル・コープ内、
協同組合運動研究会 代表者 宮本崇義
TEL. 075-934-7370 (呼) FAX. 075-934-7377
(会費払込先 郵便振替: 01060-6-77328 口座名: 協同組合運動研究会)

調査報告

現代世界という書物を読む四つの視点

境 毅 (研究会事務局)

はじめに

イランとアメリカとの戦争のきっかけとなってもおかしくはなかった、トランプのイラン高官暗殺というテロによる挑発、その後の中国武漢発のコロナウイルス、そして、あまりニュースにはなりません、アメリカでのインフルエンザでの死者1万人・・・等々。グローバル化された現代世界で、経済が収縮せざるを得ない諸事件が起きて、不安定な年明けとなっています。

実際、今日の社会は、突発的な事件がなくともその持続可能性が疑われていて、私たち協同組合の組合員は、持続可能な社会を創り出すことをめざしているのですが、この間の社会の変化についての認識がないと、私たちの取り組みも、その有効性を発揮できないでしょう。

今回の調査報告は、まず現代社会の不安について、ハラリの論考から紹介し、次に現実の世界に立ち帰ってそこで起きている不均等発展を説明し、しかる後に、モバイル革命によるデジタル経済という変化した社会状況のなかでの主体の問題について概括的に解明し、最後に、このような変容した現代世界という書物を読む方法論を、アクターネットワーク理論から紹介しましょう。

1. 現代社会における不安

① 先行きが不透明な現代社会で流行する思想書

NHK番組「欲望の資本主義」が2016年5月28日に放映されました。これが評判だったようで、立て続けにその続編が放映されています。私は、テレビは見ないので、放映されたのちの出版物で知ったのですが、関連図書が4冊手元にあります。『欲望の資本主義』(東洋経済新報社、2017年)、『欲望の資本主義2』(東洋経済新報社、2018年)、『マルクス・ガブリエル欲望の時代を哲学する』(NHK新書、2018年)、『欲望の資本主義3』(東洋経済新報社、2019年)。この番組に出演した人々の書籍もどんどん翻訳されています。

この状況は、時代の閉塞感を憂う思想の商品化で、「欲望の資本主義」の現段階が、この先、資本主義がどうなるのかという知識を求めようという時代に入っているのでしょうか。この番組以外にも、ユヴァル・ノア・ハラリの著作も『サピエンス全史』(河出書房新社)、『ホモ・デウス』(河出書房新社)、そして最近翻訳された『21Lessunns——21世紀の人類のための21の思考』(河出書房新社、2019年11月)がベストセラーになっていますし、マルクス・ガブリエルの著作も『なぜ世界は存在しないのか』(講談社)、『新実存主義』(岩波新書)など、どんどん翻訳されています。

これらの著作が商品化され、ベストセラーになっているとき、それがどのような意味を

持っているのか、と考えたときに、ハラリの『21Lessunns（レッスンズ）——21世紀の人類のための21の思考』が好材料を提供しています。その内容紹介から始めましょう。

② ハラリ『21Lessunns』にみる「幻滅」の内容

ハラリは、第一部 テクノロジー面の難題で、四つのレッスンを取り上げています。1. 幻滅、2. 雇用、3. 自由、4. 平等、です。総論的な意義を持つ、1. 幻滅、でハラリは時代感覚を表明しています。今回は、この幻滅の内容と、そして最後の第五部 レジリエンス（回復力）で述べられているハラリの幻滅への処方箋だけを取りあげます。

まずハラリが描く人間像に注目しましょう。それは次のようなものです。

「人間は、事実や数値や方程式ではなく物語の形で物事を考える。」（同書、17頁）

それはそうでしょう。でもハラリは、最後のレッスンで、この存在のあり方を批判して対案を出しているのですが、それは後で取り上げるとして、これを受け入れてハラリのレッスンを聞いていきましょう。ハラリは、これまでの近現代社会には三つの壮大な物語があって、ファシズム、共産主義、自由主義がそれだというのですが、ファシズムはすでに批判され、共産主義もソ連の崩壊によって価値を失いましたが、ソ連崩壊以降、自由主義は勝ち誇っていた、というのです。そして勝ち残ったはずの自由主義が、いま、人々にこの物語の幻滅を感じさせていると述べています。

「2008年のグローバルな金融危機以来、世界中の人々が自由主義の物語に次第に幻滅するようになった。壁やファイアウォールの人気は回復した。移民や貿易協定への抵抗が強まっている。」（同書、19頁）

いわゆるグローバリズムの動きに対する反動がみられていますが、ハラリが注目するのは、「加速する技術的破壊」（テクノロジーが引き起こす、職や伝統、制度、機関などの破壊や喪失、および、混乱や無秩序を招く急速な変化）です。これは、ベックが「サブ政治」と呼んだもので、遺伝子組み換えにしても、それは本来人々の生活を直撃する政治的な問題であるにもかかわらず、政治の網を潜り抜けて、技術とその成果物がいつの間にか受け容れられている現状を指しています。そして、ハラリの技術的破壊への恐怖感は、ITとバイオテクノロジーの波及力に対する次のような考え方にもとづいています。

「さらに重要なことがある。ITとバイオテクノロジーの双子の革命は、経済や社会だけでなく、私たちの体や心まで再構成しうる。」（同書、22頁）。

これがハラリの危機意識の背後にある基本的観点で、ハラリは、AI（人工知能）が人間の心までを再構成すると考えています。この点については、マルクス・ガブリエルが言うように、人間は動物であって、機械としてのAIは決して意識を持ちえない、という見解の方に私は軍配を上げたいと考えています。この点を保留したうえで、ハラリの、人々は存在意義の喪失を恐れている、という現代人の捉え方は、正しいでしょう。

③ ハラリの幻滅への処方箋

ハラリは、冒頭で紹介した、人間が「物語の形で物事を考える」、ということに注目し、この思考をやめることを処方箋の目標にしています。

ハラリが物語を虚構とみなす考えは、彼が「ファシズムはなぜあれほど人を惹きつけるのか」（同書、377頁）という問題意識を持っているところからきています。ではこの物語の虚構性に対してどのように対処すればいいのでしょうか。ハラリは、次のように幻想と経験とを区別するところから論を起こします。

「私たちの幻想の自己はとても視覚的であるのに対して、本当の経験は身体的であることは特筆に値する。」（同書、388頁）

そしてこの身体的な経験に依拠して、人は物語ではない、という確認から虚構性からの脱却が始まるというのです。

「人々は、『私が何者なのか？』と問い、物語を聞かされることを期待する。自分について真っ先に知っておく必要があるのは、あなたは物語ではない、ということだ。」（同書、389頁）

ハラリは経験に依拠することに関して次のように述べています。

「私たち人間は、虚構の物語を創作してそれを信じる能力のおかげで世界を征服した。したがって私たちは、虚構と現実を見分けるのが大の苦手だ。これまでずっと、この違いを見過ごすことに、私たちの生存がかかっていた。それでもこの違いを知りたければ、苦しみが出発点となる。なぜなら、この世で最も現実味があるのが苦しみだからだ。」(同書、394頁)

この世界での現実とは、自身の身体的経験ですが、そこでの苦しみに注目することをハラリは提案しています。

「というわけで、もしこの世界や人生の意味や自分自身のアイデンティティについての真実を知りたければ、まず苦しみに注意を向け、それが何かを調べるのかぎる。

その答えは物語ではない。」(同書、397頁)

この提案は、重要な問題提起を含んでいます。しかし、ハラリの解決方法には疑問があります。ハラリは、21番目の最後のレッスンで、自らの瞑想体験を語り、「ひたすら観察せよ」と述べています。ここから知れるように、ハラリの処方箋は個人的な解決方法で、運動としてのそれではありません。覚醒した人々の存在はそれとして重要ですが、覚醒した人々同士がお互いに争い合っているのでは問題解決に至らないし、現実はそのようになっています。だから問題は、覚醒した人々を創り出すことよりも、そのような人々が、どのようにして相互に協同していけるかでしょう。あるいは、人々と協同しあっていくということを覚醒しなければならないのです。そうしなければ世界は変わらないでしょう。

2. 現代世界の不均等発展の特徴

① 先進諸国におけるポピュリズムの抬頭

ハラリの自由主義への幻滅論を紹介したうえで、私たちに苦しみを与えている現実世界に立ち帰りましょう。ここ数年先進国で、従来の二大政党に代わる左右のポピュリズム政党の抬頭(あるいは支配政党のポピュリズム化)がみられますが、このような政治状況は、ハラリが指摘するように、資本主義の未来像が見えなくなっていることと関連しているでしょう。一般的には1980年代に入って政治権力を獲得した新自由主義が推し進めたグローバリズムの行き過ぎへの反動として説明されますが、新自由主義の把握にしても、グローバリズムの把握にしても、これまでの諸説では把握しきれていないように思われます。だからポピュリズムの抬頭についても、納得できるような理論はまだありません。

とりあえず、私がこれまで会報で述べてきたことを簡単に整理しておきますと、新自由主義については、それが資本主義から次の社会への過渡期の経済を、その政治的な担い手の意に反して作り出しているという点が強調されるべきでしょう。このような把握がなされない限り、新自由主義批判は、かつての福祉国家への立ち帰りという説得力のない議論に終始するほかはありません。そして新自由主義のこの側面は、金融市場の過度な自由化によって、負債経済という資本主義ではない利子生み資本の派生形態を膨大に蓄積させることで、資本主義社会が高利資本のヘゲモニーによって支配されてきているという問題と関連しています。このように問題を整理するところから、これをどのように対抗していくかという運動上の課題も見えてくるでしょう。

次にグローバリズムの現段階の把握が問われているということです。トランプの登場やイギリスのEU離脱などの動きの根底にある事態の解明が必要でしょう。その事態は、現代世界の不均等発展の特徴の理解から問題を解いていく必要があります。

② 中国がカエル跳びで、アメリカを追い越す

中国がデジタル経済で世界のトップを走っていることに気づいたのはごく最近のことでした。2018年末の揚州大学での中日社会主義フォーラムの準備過程で、社会主義市場経済からコミュニズムへの移行についての見通しが見えてき、2019年11月に大連海事大学で開催された中日韓マルクス主義フォーラムでの報告を8月に提出して以降、中国のデジタ

ル経済について調べました。そして中国から帰国して以降に驚くべき発見があったのです。

大連から帰った後、その次のステップとして現代の既存の信用制度の破壊について調べました。ブレット・キングの『未来の銀行』（東洋経済）が大いに参考になりましたが、明確になってきた仮説は、資本主義の現段階での不均等発展が、経済成長（GDP）のような指標や、それに基づく後進国の先進国へのキャッチアップや、後進諸国の雁行的発展といった従来の理解ではとても把握できないような事態が進んでいるということでした。

また従来の指標は、生産過程の変化に注目するものでした。繊維中心の軽工業から重工業への発展段階で、ドイツやアメリカ、日本などの当時の後進国が、巨大な設備投資を必要とする重工業を発展させることで世界を支配しようとし、銀行と産業の癒着した金融資本による帝国主義段階の植民地争奪戦による世界戦争という見通しが、一つのモデルとして強固に維持されていました。でも、いまさらその歴史過程の繰り返しではないでしょう。

端的に言って、中世のオランダで成立し、イギリスに引き継がれ、以降世界体制となった既成の信用制度それ自体の破壊と新たな制度の構築という、資本主義にとっての根底的なインフラの交代の問題が、いま不均等発展の内実となっているのではないのでしょうか。

つまり、現在の不均等発展は、モバイル革命によるデジタル経済の成長が、既成の信用制度の破壊と、従来の資本主義の変容を迫る形で進んでいます。このことが先進国における市民社会の変質とポピュリズム政治の抬頭の原因ではないのでしょうか。つまりモバイル革命は、後進国である中国で始まり（起点はiPhone発売の2007年にしておきましょう）、10年もたたずしてインターネットを利用したデジタル経済で先進国を引き離していきました。そしてこのモバイル革命が、インド、アフリカ等に波及し、いわゆる第三世界は先進国よりもより発達した信用制度を構築しつつあるのです。この事態が先進国に与えている打撃に対して、先進国は有効な反撃を組織していません。

信用制度はもともと資本の社会的再配分の役割を担っています。現代の信用制度は、しかし負債経済の拡大によって変容を迫られました。従来投機は、資本の社会的再配分を円滑に行う際の潤滑油として機能していました。しかし、現在では富裕層の富の蓄積の手段とされるようになってきています。また、グローバルな多国籍企業も、タックスヘイブンを利用した脱税で儲けを蓄積し、銀行などからの融資を必要とせず、逆に生産企業がローン会社などの金融業を始めるようになり、企業への貸し付けが減っていきました。こうして、住宅ローンなどの家計への貸し付けの比率が増大していったのです。そしてこの家計の負債の債務証券を証券化する技術が開発され、この消費者の負債を根に持つ新たなハイリスク・ハイリターンな証券が開発されて、投機目的で売買されるようになったのです。

こうして先進国の信用制度は、資本の社会的再配分の機能を失い、それとともに銀行の淘汰が始まっています。この分野で先進国は大きな弱点を抱えているのです。そこにモバイル決済によるネット上の信用制度が従来の「後進国」で急速に発達し、マイクロファイナンスによる中小零細企業の発展を促進し、先進国がたどった経済的発展とは別のコースで経済成長を遂げつつあるという現実になすすべもなく、トランプのように対中貿易戦争を仕掛けるというようなその場しのぎの対策を講じるしかなくなってきているのです。

以上は、現段階における資本主義の不均等発展に対する仮説の提起です。これを踏まえて、問題の中心にある既成の信用制度の破壊と、新たに形成されつつある、モバイル革命によるデジタル経済がつくりだす信用制度の分析が急務です。

3. デジタル経済における主体

① 石田英敬の新記号論

デジタル経済の発展が、既成の信用制度を破壊しつつあり、資本主義の根底的なインフラの交代を促進しつつあるとき、これは実は消費者をも巻き込んだ形で成されているという点に注目しておく必要があります。というのも、デジタル経済の端末であるモバイル（スマホ）は消費者が所有しているからです。デジタル経済の発展とは、単に生産の領域だけ

でなく、消費の領域も含めた社会全体のトータルな変革を推し進めているのです。ではこの新しいデジタル経済のもとでの主体とは、と問うときに、石田英敬の『新記号論』（ゲンロン叢書、2019年）が、興味のある論点を提起しています。

石田が新記号論の必要性を語るのは、20世紀のアナログメディアから21世紀になってデジタルメディアに代わったときに従来の記号論が役に立たなくなり、新しい記号論を創り出さなければならないという考え方にもとづいています。

記号論については、簡単にしか紹介できませんが、石田によれば、人類史最初の記号論は、印刷された文字を分析するバロック記号論で、ライプニッツが解明しました。そして印刷された文字から、電話やラジオ、映画などのアナログメディアの時代に入ると、ソシユールを元祖とする現代記号論が生まれます。これは20世紀の思想界をリードしたのですが、今日では見る影もないと石田は指摘しています。というのも現代はデジタルメディア全盛であり、現代記号論にとってはこれの分析は手に負えないからです。そこで石田が提案する新記号論は、文字学としての記号論です。ここでいう文字とは人が読み書きする文字だけでなく、コンピュータ言語、機械言語も含み、この文字は人は読めません。

このような機械言語も含めた記号を文字として捉え、それが人を支配しているというデジタル経済の現実から、石田は無意識についても、論点に移行があるとみています。つまり従来はフロイトやラカンのように「無意識は個人的で象徴的で言語的なものだ」とみなされてきましたが、現在では、「無意識は集団的で情動的でメディア的なものだ」（『新記号論』、221頁）ということになります。さらに、メディア論もコミュニケーションの観点から考察しなければなりません。

「メディアとは記号をやりとりするコミュニケーションだと考えます。」（同書、233頁）

「現在のメディア・テクノロジーは、人間の無意識に働きかけることで意識や感覚までも生み出すようになっている。・・・20世紀の二つのメディア革命を通して、人間の『記号過程』を、情報処理が支える構造が組みあがった。」（同書、234～5頁）

このような新記号論の発想を支えている現実には、デジタル経済においては、インターネットを通じて、コンピュータシステムの中に主体が組み込まれているという点にあります。この点について石田は次のように述べています。

「現代社会の個人は、メディア生活において、それぞれがアカウントを持ち、それを通してWWW（ワールド・ワイド・ウェブ）のようなネットワークのなかに位置づけられて相互に結びついています。ぼくはそこでは、人間とコンピュータ、それぞれの『記号の正逆ピラミッド』が紡錘形のようなかたちになって、相互リンクによって結びついていると考えます。つまり、現代のメディアは、記号過程と情報処理の双対的プロセスとしてネットワーク化されて成立している。みんながiPadやスマホを端末として、身体も心もWWWで相互に結びついている今日のコミュニケーション状況を思い浮かべてください。」（同書、236頁）

私は、テレビは見ませんが、映画もあまり見ません。しかし、マトリックスという映画は見ましたが、そこには人びとがコンピュータに結びつけられて、何もせずに横たわっている状態で、人生を送っている、という場面が出てきますが、まさにそれが現実になっているのです。

② 石田の主体論

では、デジタル経済のシステムに繋ぎ止められている現在の消費者にとって何が問題なのでしょう。石田はスマホを持っている消費者の消費行動への理解からさらに進んで、現在のデジタル経済のもとでの生活世界への批判の観点を次のように提起しています。

「消費をもっと理解することからしか、つぎの社会へのオルタナティブはない。ぼくはその理論をつくっていると思っている。つまり、どういうふう欲望はつくられるとか、どういうふうにして欲動は制御されるのかとか、どういうふうにして情動は動員されるのかとか、そういう理論です。」（同書、313頁）

消費者の消費行動の意味だけではなく、消費というポジションからの問題提起の有効性についても次のように述べています。

「消費者というポジションから問わないと、つぎの社会を問う言説は有効性を持たないんですね。つまりぼくたちは、消費者というポジションから『記号接地としての生活世界は大丈夫なんですか』という問いを出すべきなんです。意味とか意識のエコロジーは大丈夫なのか、とか。いまの世界は生存だけでなく意味をめぐる闘争でできていて、そのなかで消費の問題は生活世界に意味を与えるもっともジェネラルな問いである、とか。」(同書、315～6頁)

もともと生活クラブの原点は消費者目線からの商品批判でした。取り扱うものを商品と呼ばず、消費材と名づけたところにそれが現れています。石田のここでの問題提起は、消費者、言い換えれば生活者の側からのデジタル経済への批判の観点ではないでしょうか。

「検索することにより、ぼくたちの『自分であることの意識』は生み出されている。検索しているとき、あたかも『自分』がイニシアティブを取っているように思いがちだが、しだいに検索語にもとづいて自分を『個体化』していくようになる。ネットでは言語における個体化の活動が、ハイパーテキストのリンクによって横断され断片化し計算論化され、個体が可分子に変えられていくようになる。言葉や知識、記号や言説までが資本主義の計算によぎられる時代に人類は到達したということなのだ。」(同書、390頁)

たんに生活過程で消費される商品だけではなくて、生活すること自体が資本主義に捉えられている、という現実、生活クラブの問題意識をさらに更新させていかなければならないことを示しています。

「ユーザたちがせっせと情報を吐き出してため込むミツバチのような無償労働の結果、何十億人分もの個人データを売買する巨大企業が巨額の利益を上げ、データがマーケティングや企業戦略に生かされる。」(同書、396頁)

デジタル経済につながれた消費者のこのような存在からどのようにして主体形成が可能なのでしょうか。最後に、現在はやっているアクターネットワーク理論を検討してその可能性を探っていきましょう。

4. 「おおぜいの私」の組織化は可能か

① アクターネットワーク理論(ANT)

ブリュノ・ラトゥール(2019)『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』(法政大学出版局)は、今はやりのANT(アクターネットワーク理論)の方法論をまとめたテキストです。研究者向けに書かれてはいるのですが、しかし、彼は、社会学の従来の研究方法に異論を述べていて、しかもその異論が、何かの理論を現実には当てはめるのではなくて、現実に存在している様々なアクター(実践主体)の動きをそれとして記述しようという立場で、私たちアクターにとっても非常に興味ある論点を提起しています。

ラトゥールは、社会学を社会的なものの科学という従来の理解に変えて、それを「つながりをたどること」というように再定義しています。

「社会学を、『社会的なものの科学』と定義するのではなく、つながりをたどることと定義し直すことで、社会科学本来の直感に忠実であり続けることができる。・・・この第二の意味において、社会的という形容詞は、白羊のなかにいる黒羊のように他とは異なる事物を指し示すのではなく、それ自体は社会的でない事物同士のある種の結びつきを指し示すものである。」(ラトゥール、15頁)

従来の理解ですと、何かしら出来上がった社会を念頭に置いて、それを分析する科学として社会学があると考えられていますが、その考え方を捨てて、そこにあるのは「つながり」であり、このつながりは人と人だけではなくて、モノとモノ、モノと人とのつながりも含めようという考え方です。そうすると従来の社会学の理論では理解できないような事態が生まれ、社会的なものを組み直すという作業にとりかかることができるというのです。

このような考えからラトゥールは、次のような方法を提案しています。

「(ポストモダン風の単なる批判ではなく)社会的なものを集め、社会的なものを結びつけ直せる新たな制度、手続き、概念が何であるのかを探る方がはるかに重要である。」(同書、26頁)

このような方法は次のような形で指南されています。これが、一番優れた問題提起だと私には思われます。

「社会科学者の役目は、もはや、何らかの見方を押し付けたり、受け入れ可能な事物の範囲を定めたり、アクターたちにアクター自身は何をしているのかを教えたり、アクターたちの盲目的な営為は何らかの反省性を付け加えたりすることではない。ANT生まれのスローガンを使えば、『アクター自身に従うこと』が必要である。つまりは、この世のすべての存在がアクターの手のなかでどうなっているのかをアクターから学び、そうした存在をうまくかみ合わせるためにアクターがどんな方法を練り上げてきたのかをアクターから学び、アクターが打ち立てざるをえなかった新たな関連を最もうまく定義できるのはどのような説明なのかをアクターから学ぶために、アクターによるたいていは野放図なイノベーションを追いかけていくことが必要なのである。」(同書、27～8頁)

このように社会学の主体を研究者からアクターに置くというのは、人類学で取られている方法論であり、ラトゥールも人類学に手を染めていました。人類学ではもっぱら観察対象である先住民の動きを記述し、体系的に調査するところからしか始まりません。では現代社会を観察対象とする人類学の方法からはどのような分析視角が拓かれるのでしょうか。

② ラトゥールのアクターとグループ論

まず注目すべきは、好奇心を持つことです。

「社会学もまた驚きに始まる。・・・社会的なものという野獣をなんとかしてでも手なづけようとしている——目には見えないのに感じ取れるもの、当たり前のことなのに驚かされること、ありきたりなのにどうも捉えがたいもの。」(同書、43頁)

次に外からの介入を控えることです。

「社会的なものを規定し秩序づける役目はアクター自身に任せるべきであり、分析するものが取り上げてしまってよいものではない。したがって、ある種の秩序感覚を取り戻すのに最善の解法は、所与の論争をいかに解決すべきかを決めようとするのではなく、他ならぬ論争同士の結びつきをたどることである。」(同書、47頁)

このような発想からすれば、アクターが属するグループとは、何か固定的なものではなく、グループ形成だけがある、ということになります。いくつかの引用をしておきます。

「いずれかのグループに属するということは、現在進行中のプロセスであり、そのプロセスを構成するのは、不確定で、脆弱で、議論を呼び、たえず移り変わる紐帯である。」(同書、54頁)

「(グループ) その特徴とは、①グループは代弁者を必要とすること、②反対グループが配置されること、③グループの境界をさらに強化するために新たな資源が持ち出されること、④非常に専門的な道具一式を有する専門家が動員されることである。」(同書、61頁)

「働きかけがなければ、グループはない」(同書、67頁)

「グループを作り続けることを止めれば、グループはなくなってしまう。」(同書、68頁)
グループを創り出そうとするときに非常に役に立つ問題提起だと思います。

③ アクター同士のつながりはどのようなものか

先に、ハラルの処方箋が、覚醒した個人を作ることであって、このような人々の協同については触れてはいないが、しかしむしろそれが重要だと指摘しました。いまこの問題が、ラトゥールによってここで考察されています。その際のポイントは「行為はアクターを超えてなされる」ということです。

「私たちが行為するとき、他に誰が行為しているのか。どれだけの数の事物を用いているのか。どうして自分がしたいことをしないのか。なぜ、私たちは皆、自分たちが作り出

したわけではない力に縛られるのか。こうした問いが、社会科学の最も古くてもっとも正統な直感であり、群衆、大衆、統計的平均、見えざる手、無意識の衝動が、(それまで私たちの卑小な魂を押し下ろしたり引いたりしてきた天使と悪魔に取って代わり始めたのはもちろん)感情と理性に取って代わり始めてからというもの、観察者をとりこにしている。」(同書、84頁)

この行為はアクターを超えてなされる、という現実をとらえる観点が「モノにもエージェンシー(アクターとしての代表権)がある」という問題です。この観点から、懸案である覚醒した人々の協同を実現するという課題に接近できるように思われます。

「対面的な相互作用としての社会的なものと、安定的、持続的な相互作用としての社会的なものとを区別することは特に重要である。というのも、人間社会のなかで基礎的な社交スキルを呼びうるものを抜き出すことが現実的に困難であるからだ。」(同書、123頁)

ラトゥールは、対面関係は、束の間のもので、不安定だとみなし、他方で安定的な相互作用もあるが、それはモノをもアクターとして把握するところから理解できるとしています。だから、次のように社会的な力という観念の再構築をしています。

「社会的な力という概念は解体して、つかの間の相互作用ないし新たな関連で置き換えることには、大きな利点がある。」(同書、124頁)

これはどういうことでしょうか。それは次のように説明されています。

「つまり、社会的なまとまりの持続性に訴えるときには、意識的にせよ無意識にせよ、常に、その脆弱な社会的紐帯に対して他の多数の非社会的な物事による影響力を加えているのだ。常に物事こそが——今やこの語を強い意味で用いている——、実際には、薄命の『社会』に『強固な』質を与えている。したがって、実際には、『社会の力』という語で社会学者が表しているのは、社会そのものでなく——そうであればまったくもって呪術的である——、非対称性をより長く持続させるためにすでに動員されている全存在を何らかのかたちでまとめたものである。」(同書、127～8頁)

私は、以前、数名の共同体で弁当屋を始めたときに伴走していて、経理が不分明だったことでもめ事になった経験があるのですが、その意味がよく分かります。対面関係は脆弱であること、共同体を維持するには、対面関係での協同を補強する様々な事物が必要なのですね。

紙数の関係で今回はこれで終わりますが、生活クラブ運動を時代の変化に対応して更新していくうえで参考になるとと思われる論点を整理してみました。

3月共催企画

テーマ 協同組合が変える韓国の経済構造

講師：柏井宏之さん(共同連運営委員)

日時：2020年3月8日(日)14:30～17:00

会場：キャンパスプラザ京都(JR京都駅徒歩5分)

主催：e未来の会 ひとびとの経済政策研究会

連絡先：080-3139-7820(境)

3月は、e未来の会と、ひとびとの経済政策研究会とが主催する柏井宏之さんの講演会に共催団体としてかわります。参加費無料です。奮ってご参加ください。